

2021年 9月 国際放送番組審議会

2021年9月のNHK国際放送番組審議会（第683回）は21日（火）NHK放送センター（ウェブ会議）で10人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず「2021年度後半期の国際放送番組の編成」について、および、最近の国際放送の動きについて説明があり、意見交換を行った。ひき続き、「A Man who Aligned Japan with the Nazis」について説明があり、意見交換を行った。最後に、国際放送番組の放送番組モニターと視聴者意向の報告を行い、会議を終了した。

(出席委員)

委員長	岡田 亜弥	(名古屋大学大学院国際開発研究科 教授)
副委員長	河野 雅治	(株三井住友フィナンシャルグループ 取締役 元駐イタリア大使)
委員	阪田 恭代	(神田外語大学外国語学部 教授)
委員	佐藤たまき	(古生物学者、東京学芸大学教育学部 准教授)
委員	田中浩一郎	(慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科 教授 (一財)日本エネルギー経済研究所 参与)
委員	永井 均	(歴史学者、広島市立大学広島平和研究所 教授)
委員	中曾 宏	(株大和総研 理事長)
委員	仲本 千津	(社会起業家、株RICCI EVERYDAY 代表取締役COO)
委員	平子 裕志	(全日本空輸(株) 代表取締役社長)
委員	村上由美子	(MPower Partners ゼネラル・パートナー)

(主な発言)

<「2021年度後半期の国際放送番組の編成」について、
および、最近の国際放送の動きについて>

- 「2021年度後半期の国際放送番組の編成」についての報告を受け、国際放送と多言語放送の国内外への発信をさらに強化していることを、頼もしく思っている。特にアフガニスタンやミャンマーの情勢について、引き続き注力して発信してほしい。配信手段を、地域衛星から、インターネットによる配信サービス、OTTにシフトさせていく一環として、ベトナムとタイでOTT配信をスタートさせたことは、アジア地域での視聴者拡大につながると思う。NHKワールド JAPANの視聴者からの反響を地域別に見ると、北米に比べ、アジア、アフリカが少ない。今後、こういった地域での発信・展開をどう進めるのか聞きたい。また、東京2020オリンピック・パラリンピックの報道について、さまざまな制約の中で、どの程度、各国の放送局や選手たちとつながりを持つことができたのか。現場での感触を教えてください。

(NHK側) OTTについては、衛星に比べてコスト面でメリットがあることを踏まえ、進めていこうと思っている。ベトナム、タイではOTTでの配信が開始されており、その他の地域でも参入を図っている。効率的かつ効果的な配信を目標に、対処していきたい。

(NHK側) 東京2020オリンピック・パラリンピックの報道については、国際放送の場合、映像の使用に制限があるため、限られた映像を生かすニュースの時間帯を決めて、競技の結果を中心に伝えた。また、日本の選手に加え、アジアの選手の活躍も、動画が使えない場合は静止画も利用しつつ、できる限り伝えた。海外の番組モニターからも、アジアの選手の活躍を伝えた点がよかったという意見が届いている。また、外国の記者たちが、NHKワールド JAPANを情報源の一つとして見ていたこともあり、映像の提供を依頼されるケースもあった。日本で開催されたオリンピック・パラリンピックを放送や取材を通じて、海外にアピールできたのではないかと考える。

< 「A Man who Aligned Japan with the Nazis」

(8月28日(土) 10:10 ほか) について>

- 番組の構成やナレーションが的確で、大変見応えのある番組だ。第2次世界大戦における軍や政府の意思決定について組織論的に検証した本などもあるが、この番組では、当事者の証言や手記によって具体的に過程が示されており、実証的価値が高いと思う。元駐ドイツ大使の大島浩氏がナチス、ヒトラーと親しく、日独伊三国同盟を導く立役者だったということだが、おおもとにあったのは、ドイツが対ソ連で勝利するという大島氏の信念だった。このことが誤った情報を生み、日本の意思決定や運命を決めていったことが番組から読み取れた。一人の大使の思い込みにより、正しい情報が組織全体に伝達・共有されず、作戦が実行されたということが理解できた。大島氏に疑義を唱え、更迭された元駐ハンガリー公使の大久保利隆氏の手記を伝えたことも重要だ。証言や本人の手記で史実を裏付けたことから、教訓的意味も伝わった。肉声テープは、大島氏が没する2年前の1973年に録音され、40年以上、インタビューを行った明治大学の三宅正樹名誉教授の手元にあった。40年を経て、去年NHKがこのテープを入手したいきさつも知りたくなった。
- 太平洋戦争開戦80年にふさわしいドキュメンタリーだと思う。今年は東京裁判開廷75年でもあるので、A級戦犯だった大島氏を取り上げたのは、時宜にかなっていたのではないか。テープの内容は非常に貴重な歴史証言を含んでいる。大島氏が日本とナチスとを結び付ける、いわばフィクサーであったことがとてもよく分かり、リッペントロップ元ドイツ外相との家族ぐるみの関係が、ヒトラーをはじめナチス首脳部の信頼を勝ち得る背景にあったことも、家族の証言からうかがい知ることができて興

味深かった。ヒムラー・大島会談記録やゲッベルス日記等、ドイツ側の資料と日本側の記録とを突き合わせることで番組がより立体的になった点も評価したい。一般的に、太平洋戦争はアメリカとの戦争と捉える傾向が強いが、日独関係の角度から太平洋戦争への軌跡を追った点も注目すべきで、視聴者が、太平洋戦争に対する見方を再考するきっかけになるのではないか。日独伊三国同盟が、日中戦争とドイツが進めるヨーロッパでの戦争を結び付けたというドイツ研究者の解説があったが、この同盟がターニングポイントの1つになったという指摘であり、番組の柱になるコメントだったと思う。さらにノンフィクション作家の保阪正康氏が最後に指摘していた、バスに乗り遅れるなという言葉に象徴される、日本政府や軍、あるいは国民の同調、機会主義的な考えが太平洋戦争への道を進む大きな要因になったという点も重要だと思った。ただ、大島氏に焦点を強く当てたことで、松岡洋右元外相の外交的な役割がやや過小評価されているように感じた面もある。また、三国同盟は、ドイツがイギリス、フランスを制した後にアジアに進出することをけん制する意図もあったという最近の研究についても触れられていなかった。国際検察局による大島氏への尋問調書にある証言も、この番組では取り上げられていなかった。これらの点について、制作者の意見を聞きたい。

- 圧倒的に見応えのあるドキュメンタリー番組だと思う。歴史研究者が取り上げるテーマに新たな材料や見方を付け加え、歴史的な価値が高いばかりでなく、現代に教訓も伝える良質な番組だ。大島氏の告白と、国内外の研究者、そして親族の証言を組み合わせた手法から、解き明かされた事柄やメッセージが整理され、視聴者にも大変よく伝わったのではないか。番組には、大島氏について、驚がくの、と言ってもよいほど新しい事実が含まれていた。ヒトラーをはじめ、ナチスの中枢との親交が深かったこと、日独防共協定や日独伊三国同盟策定の陰の立役者だったということのほか、スターリン暗殺計画にも関与していたということには驚きだ。また、ヒトラーについても、大島氏を相談相手とするほどの関係だったことや、判断を誤るので酒を飲まなかったというエピソードは新鮮だった。大島氏と対立して天皇に早期講和を進言した大久保氏という気骨のある外交官についても初めて知った。歴史上の人物の人物像を伝えるうえで、親族の証言というのは大変うまい手法だと感じた。リッベントロップ元外相の孫の証言は特に印象に残った。ただ、新事実の数だけ新しい疑問もわいてくる。大島氏が、ナチスの中枢から厚い信頼を得たドイツ専門家であったならば、なぜ1939年の独ソ不可侵条約締結を察知できなかったのか。スターリン側との攻防を境にドイツが劣勢に転じていったことを、どの程度知っていたのか。あるいは日米開戦は、ナチスにどのように伝えられていたのか、いなかったのかなどだ。大島氏の思い込みの怖さも印象に残った。ドイツへの思い入れが強かったため、真実に盲目になったのではないか。危機的状況になったときに、希望的観測や耳触りのよい情報だけが選択されがちだというのは、恐らく現代にも通じる教訓だろう。また、大島氏は終身刑の判決を経てもなお、生涯ヒトラーの信奉者だったというメッセージを受け止めたが、三国同盟の末路を自身で体験しながら、なぜこの信奉が消えなかったのか疑問も残った。また、ナチスを題材に番組を制作する場合には、ホロコーストの問題への配慮を忘れることはできない。いかなる形でも、ホロコーストは、肯定することができない、という受け止めは国際社会に定着しており、番組で扱う際にも留意しておく必要がある。

- テーマがタイムリーで、日米間に偏らず日独伊間の関係にも焦点をあてたことが高く評価できる。また、歴史ドキュメンタリーとしても高品質で、日本に対する批判的な視点も含まれていてバランスが取れていた。また、国内放送と国際放送が連携し、近い時期に放送したこともよい試みだったと思う。海外の視聴者向けに、日本、ドイツ、アメリカといったさまざまな視点で番組を構成したこともよかった。ニューヨークの番組モニターのコメントで、歴史ドキュメンタリーとして勉強になったという評価があったが、ほかにも海外視聴者からの反響があれば聞きたい。また、ぜひドイツでの番組上映と研究者や市民との対話を企画するなど、市民交流のプログラムなどと連携して展開を図ってほしい。
- 日独伊三国同盟に関しては学校の教科書で説明されていた範囲の知識しかなく、大島氏については知らなかったのが、非常に興味深く視聴した。外交官であった期間だけではなく、職を離れていた期間もナチスとつながりを持ち、一私人でありながら同盟の立役者になったということに驚いた。太平洋戦争開戦につながる動きや意思決定について知る機会となり、興味深かった。判断の誤りで、先に向けた方針を間違えることの恐ろしさも感じた。第1次世界大戦で国が疲弊する中、ドイツ社会がカリスマを求めたことでヒトラーが台頭し、教養のある外国人であった大島氏をも心酔させた事実は、いまの社会に生きる私たちにも教訓になる。
- 重厚な歴史検証のドキュメンタリーで、NHKだからこそ制作できた番組だと感じた。大島氏は、日独伊三国同盟を提唱し、ヒトラーに個人的に食い込んだことを考えると、敗戦の一因や責任を担うことになったことはともかくとして、有能な外交官であったと言えると思う。戦争は相手の意図と自らの能力を読み違えることで発生し、不正確な情勢分析により悲劇を拡大させることを考えると、この番組で、典型的な例を検証したとも言える。一方で、テープの公開に同意した夫人の大島豊子さんの心境は、もう少し説明してもらえるとよかったと思う。
- 質の高い歴史ドキュメンタリーで、特に海外の視聴者に新しい事実を伝えた点が評価できる。そのうえで、大島氏の人間的な魅力の描写などが、ホロコーストの犠牲者とその家族にどう受け止められるのか気になった。ホロコーストに関してはポジティブなコメントや評価を下すことはできない。大島氏のインタビューでは、経済的な評価を加えた分析をしなかったことを反省する発言はあったが、口調はかったつで、あまり後悔の念がない印象を受けた。この番組は、大島氏という一人の人間のドキュメンタリーであり、その中で、晩年の大島氏の言葉を率直に伝える意義はあるが、海外視聴者、特にホロコーストの犠牲になった人たちに対して、日本におけるナチスやホロコーストの受け止めについて誤解が生じないように、伝える際の細かい配慮が重要だと思う。
- 大島氏が、赴任した国の最高指導者の信頼を得たことを考えると、その外交の実力は高かったのだろうと思う。しかし、結果的に、ソ連の実力を全く評価できていなかったことで、致命的な判断をした。ホロコーストについては、赴任期間中にまだ顕在

化していなかったのかもしれないが、ユダヤ人に対する政策をどう理解したのかについて強く疑問に思う。独裁者に対して傾倒し、行き過ぎる親交がリスクにつながることは教訓とすべきだ。一方で、最終判断は政府がくだすもので、本国が現場の大使の判断にはある程度の限界があることを十分心得るべきだったとも感じた。政策に関する判断に関わった当事者が、記憶を記録に残すことの重要性を再認識させた意味でも、非常によい番組だった。

- 日独伊三国同盟に関しては、教科書での知識しか持っていないので、番組で大島氏が暗躍していた背景を知ることができ、理解を深めることができた。こうした優れた歴史ドキュメンタリーが国際放送だけでなく、国内でも放送されることは意義が大きいと思う。大島氏の存在や晩年の振り返りについて、海外視聴者の意見もぜひ聞いてみたい。
- 映像、写真、テープなどの素材をうまく生かし、関係者のインタビューも加えて構成された、大変良質なドキュメンタリーだった。大島氏という歴史を動かした人物の肉声テープが残っていたことが、この番組の価値を高めている。歴史に新しい解釈、知見をもたらすことができた、価値の高い番組だ。大島氏の存在がなかったら、日本の現代史の帰すうは大きく異なっていたのではないかと思われ、外交官の役割と現代史との関係についても興味を深めた。大島氏の果たした役割について、ドイツやイタリアにおいてどのように認識されているのかにも興味を持った。

(NHK側) なぜ、今になって大島氏のインタビューが公開されたのかという疑問について答えると、明治大学の三宅名誉教授は、そもそも公開しない前提でインタビューを録音し、1973年以降、自身の論文等の参考資料にとどめる形でテープを使用していた。一方で、実は、去年の9月27日は、日独伊三国同盟締結から80年の節目だった。このため、私がこの節目に向けて、三国同盟関連の取材を進めていたところ、神奈川県在住の郷土史家から、このインタビューテープについて情報を得た。三宅教授に接触したところ、NHKに提供することに理解を得ることができたという経緯だ。また、今回の番組は、大島氏に焦点を当てたため、三国同盟締結において重要な存在である、松岡洋右元外相の紹介は相対的に少なめになったが、松岡元外相の役割を過小評価しているということではない。当時の日本が三国同盟の締結を決断した主な理由は、ドイツのアジアにおける英仏の植民地への進出を防ぐ意図からだったという説について、内容は承知しているが、50分の番組の中で、すべての説を伝えることは難しく、今回は割愛した。GHQによる大島氏への尋問調書や防衛研究所によるインタビューも検証したが、今回の番組は、三宅教授に提供されたテープを軸に構成したため、これらは積極的に使わなかった。テープの大島氏の口調については、公開を前提にせず、研究のために行われたインタビューであったため、メディアの取材に答える場合とは異なり、大変リラックスした雰囲気であっ

たことが影響していると思う。ホロコーストについては、大島氏は、このテープの中でほとんど触れていない。「噂があるのは知っていたが、あれほど大規模なことが行われているとは全く知らなかった」という一言を発しているだけだ。この部分を取り上げるかどうか検討も行ったが、取り上げる場合は、中途半端に伝えるテーマではなく、きちんと説明を加えることが必要だと考えた。実際に、大島氏がほとんど言及していないこともあり、今回の番組にあえて含めることはしなかった。豊子夫人がテープの公開に同意した理由については、ご本人が亡くなられているため、今となつては真意を尋ねることはできない。三宅教授は、「大島氏は公開しないでくれと言っていたものの、自身の思いのたけを後世に残すことを、実は期待していたと、豊子夫人が感じていたのではないか」と考えているようだ。